

パネル発表「自然活動や飼育活動を通しての 環境教育のあり方について考える」

佐々昌樹

1 主題設定の理由

幼稚園教育要領には、「幼児期における自然の持つ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる」と記されている。しかし、現代社会における幼児を取り巻く状況は、自然や遊び場の減少、ビデオやテレビゲームの普及による遊びの変化により、自然体験が大幅に減少しているのが実情である。昨今、教育現場においてビオトープ作り等の自然活動に関心が高くなってきているのは、まさに子ども達の自然の実体験が不足してきていることに対する問題意識の現われと言えよう。また、住宅事情等の理由により、自宅で動物を飼育していない家庭が増加しており、幼児が小動物と触れ合う機会が少なくなっている。では、具体的にどのようにしたら幼児が自然との関わりを深めて遊びを活発にしていけることができるのだろうか。また、飼育動物と触れ合う場を提供することができるだろうか。そこで、環境設定の工夫と幼児の活動への援助について考え、それを実践することとした。

2 研究方法

(1) 自然環境の再認識

園内外の自然環境を調査して「春の自然地図」を作り、子どもを取り巻く自然を再認識し、その指導上の有用性を検討する。

(2) 自然環境の工夫（ビオトープ作り）

豊かな自然体験ができるような環境を、子どもと一緒に作ってみる。そして日常の保育の中で子どもと自然との関わりに意識して目を向け、子どものつぶやき、行動等を記録するように、記録の仕方を考えてみる。

(3) 自然環境の活用

園内外の環境をどのように保育に生かせるか考える。殊に生き物との関わりについて子ども達にとって印象的な体験になるような保育を考えてみる。

(4) 園内外の自然の変化の様子を調べる

園内外の秋の自然環境を調査して「秋の

自然地図」を作り、子ども達の遊びを見つめ直し、保育展開するための方法を考える。
(5) 自然環境との関わりの中間検証をする
これまでの実践を記録に基づいて振り返り、子どもが活発に自然と関わるようになるために、どのようなことを心がけると良いか試みる。

(6) 冬の自然の様子を調べる

園内外の冬の自然の様子を調べて、「冬の自然地図」を作り、保育展開するための方法を考えてみる。

(7) 自然の活動から環境教育へ

これまでの活動を通して得られた様々な成果を再確認し、幼児教育の中での環境教育のあり方について考え、これからの園庭の自然作りや自然の遊びについて検討する。

(8) 飼育動物の世話をし、触れ合う機会を多くする

3 まとめと今後の課題

自然や飼育動物との関わりは、あらゆる領域と繋がる重要な活動であるということである。子どもが興味を示す自然は予想以上に広範囲に及び、同じものでも季節の移り変わりによりあらためて認識されていき、同じ植物や昆虫等を見ている、そこには一人一人違う見方、発見があり、驚きや感動がある。そこからそれぞれがそれぞれの興味関心を持ち、次への行動に移っていく原動力が芽生えてくるのである。

この子ども達一人一人の違いを知る上で大切となるのは、子どものつぶやきや行動をきちんと記録しておくことである。そして、教師自身が植物や昆虫の名前等身近な自然に日頃から関心を持ち、子どもの疑問に答えられるよう共に学ぶ姿勢を常に持つことが大切となるのである。

自然や動物との関わりは、年間を通して、また入園から卒業するまで継続して活動を続けることが重要であり、さらに子ども達の活動が活発になるように援助に努めることが重要である。加えて、自然や動物と子どもが関わることの大切さを保護者にも理解して頂き、連絡を十分に取り合うこ

とも大切なことである。

また、自然との関わりを今一步踏み込んだものとなるように、園庭の落ち葉や、生ごみ、飼育動物の糞から堆肥を作り、落ち葉焚きの際にできた灰も肥料として使うこ

とで、自然の循環を実体験するよう活動を広げて、更に自然との関わりを深めていきたい。

(まこと幼稚園園長)

